

『嵐が丘』における共感

栗 田 枝緒理

序 論

ブロンテ姉妹の一人として知られるエミリー・ブロンテは、生涯でたった一つの長編小説『嵐が丘』をこの世に残している。この小説は出版当初その常軌を逸した内容により強い反発を読者に呼び起こした。それは内容の異質性というよりむしろ、登場人物たちの発言や行動が原因であろう。例えば、ヒースクリフやヒンドリーによる暴力行為、キャサリンの激しすぎる気性などが、出版当時の読者に受け入れられなかった原因として挙げられる。中でもヒースクリフの人間性については、著者エミリーの姉で『ジェーン・エア』や『ヴィレット』の作者としても知られるシャーロット・ブロンテも彼の孤独や人間的な性質を認めたにもかかわらず、“[...]we should say he was child neither of Lascar nor gypsy, but a man's shape animated by demon life — a Ghoul — an Afreet.”¹と結論付けている。

作者の姉、シャーロットに「人間ではない」と結論付けられたこのヒースクリフというキャラクターは、本作において最も重要なキャラクターである。なぜなら、本作は彼の登場から始まりそして彼の死を持って終結する、いわばヒースクリフの一代記とも言える作品だからだ。ヒースクリフはそもそも、嵐が丘の主、アーンショウ氏が旅先のリバプールで見つけ、屋敷に連れ帰った捨て子である。当初、その身元不明の少年は黒い髪と目、色黒の肌をして、ボロをまとったジプシーのようであった。この少年は引き取られたことによって飢え死にすることは免れたが、その裏でアーンショウ家の長男、ヒンドリーによって暴力をふるわれる等の苦痛を味わっていた。一方で、彼はキャサリンという名のこの家の娘に気に入られ、彼女と共に成長する。しかし、その彼女もまたヒースクリフの身分の低さから彼を捨てエドガー・リントンとい

う男性との結婚を決める。これをきっかけに、彼はアーンショウ家とリントン家の両家への復讐とキャサリンへの捨てることのできない深い愛情を胸に生きていく。

ヒースクリフによる復讐は、アーンショウ家とリントン家の多くの人々を巻き込み、彼らを不幸へと陥れる結果となった。また、作中には度々ヒースクリフによる暴力が描かれていることも事実である。しかし、暴力や復讐といった要素はあくまで彼の一面に過ぎない。彼は他人の不幸を理由も無しに望んでいたわけでもなく、他人に暴力を振るうことで満足を得るような殺人鬼ではないのだ。物語の中盤で、ヒースクリフの恋人であるキャサリンが他界し、その後のほとんどの物語が彼の復讐を中心に描かれている。そのため、ヒースクリフを復讐心の強い悪鬼のようなキャラクターと捉えがちなのだが、その裏には常に捨てることのできないキャサリンへの愛情と彼女を失った苦痛に苛まされるヒースクリフの姿がある。このような一面を持つヒースクリフをなぜ悪鬼として捉えることが出来るのだろうか。彼ほど人間味にあふれた者がほかにいるだろうか。

ヒースクリフは多くの人物の人生をその手に握り不幸へと導いているが、ヒースクリフの人生もまた他者、特にキャサリンという女性に左右されている。前述したようにヒースクリフは望まれない存在として嵐が丘や鶴の辻の人々に嫌われ、見下された人物である。そんな彼を受け入れ、また彼が心を開いた唯一の人物はキャサリン・アーンショウである。キャサリンの望みはヒースクリフの望みであり、彼女の苦しみは彼の苦しみともいえるような、異体同心の関係は閉鎖的な環境の中でヒースクリフが見つけた唯一の幸福といえる。この異体同心の関係には他者の望みや喜び、苦しみといった感情を自分のものに昇華する、深い意味での「共感」や「共鳴」といったものが不可欠となっている。幼い頃に築き上げたキャサリンとヒースクリフの「共感」は、二人の関係に他者が介入することによって失われてしまう。つまり、ヒースクリフを除外したキャサリンとリントン家の交流が二人の異体同心の関係を崩壊へと導くのである。

『嵐が丘』という物語から、「ヒースクリフ=悪鬼」といったイメージを取り除き、彼の一生に目を向けると、彼がキャサリンとの「共感」に幸福を見出し、そしてそれを失い迷走し、またこの「共感」を取り戻すまでのプロセスが描かれていることに気づく。本論文は、ヒースクリフとキャサリンの間にある「共感」がどのようにして成立し、また彼の人格や人生にどう影響を

与えたのかについて論じていく。

本 論

1. 共感の成立と崩解

ヒースクリフとキャサリンの異体同心の関係と「共感」はどのように成立したのか。このことを論じる上で注意しなければならないのは、ヒースクリフのキャサリン以外の人物との関係がいかにか希薄であるかということである。アーンショウ氏に保護されるという幸運な偶然で嵐が丘で暮らすことが出来たとはいえ、ジプシーの少年ヒースクリフは多くの人に受け入れられずに育っている。このような閉鎖的な環境だったからこそ、キャサリンとの間に成立した友人関係は単なる友人関係の意味を超えたものとなっている。つまり、ヒースクリフとキャサリンの間に成立した「共感」はヒースクリフの抱える「孤独」によってより重要度を増すということである。本章では、ヒースクリフとキャサリンの「共感」の成立をヒースクリフの「孤独」にも着目し、考察する。

嵐が丘に暮らし始めた当初、ヒースクリフは多くの人々に毛嫌いされている。それにもかかわらず、この時期のヒースクリフは決して孤独というわけではない。むしろその正反対の状況にあった。なぜなら家族も、住む家も持ちえなかった彼が、アーンショウ氏の擁護とキャサリンとの友人関係を得たためである。アーンショウ氏の愛情や擁護がヒースクリフの人格に与えた影響をネリーは次のように語っている。

It was a disadvantage to the lad, for the kinder among us did not wish to fret the master, so we humoured his partiality; and that humouring was rich nourishment to the child's pride and black tempers. (32) ²

しかし、ヒースクリフはアーンショウ氏の厚意に対し感謝の意を表していない。その理由をネリーは“he was simply insensible” (31) と語っている。つまり、彼はいつ自分がかつてリバプールでおくっていたような生活に逆戻りするか分からない不安定な状況であることを理解しておらず、彼がアーンショウ氏から受ける厚意は当然自分にはあるものだと考えているのである。

このことは、当時の彼とキャサリンの人間関係からもうかがえる。ヒースクリフとキャサリンの間には友情関係が成立しており、彼はアーンショウ氏よりもキャサリンを優先している。これはキャサリンが父の前でわざとヒースクリフを従えようとする以下の箇所から証明できる。

[...]showing how her pretended insolence, which he thought real, had more power over Heathcliff than his kindness: how the boy would do *her* bidding in anything, and *his* only when it suited *his* own inclination (34)

しかし、ヒースクリフの平穏な生活は、アーンショウ氏の死によって一変する。アーンショウ氏に代わり、彼を嫌悪するヒンドリーが嵐が丘の主人としての権利を行使し、その結果ヒースクリフは家族の一員ではなく、使用人へと格下げされる。この時に初めて、ヒースクリフは自身の不安定な状況というものを意識せざる終えない状況に置かれたのである。アーンショウ氏の擁護があったからこそ、嵐が丘の人々はヒースクリフを受け入れる形をとり親切にしていたのであって、彼が使用人となった今、彼への他の使用人達の態度も大きく変わったはずである。ヒンドリーのこのような仕打ちに対し、ヒースクリフが耐え、嵐が丘を出て行かなかった理由をネリーは、“[...]Cathy taught him what she learnt, and worked or played with him in the fields” (36) と語っているが、たとえ彼が嵐が丘を出て行ったところで生きる術があったのだろうか。ヒースクリフは嵐が丘での扱われ方の変化を敏感に察知し、自身が生きるためには従うしかないことを理解し耐えていたのである。

アーンショウ氏の擁護を失い、格下げされたヒースクリフにとって、キャサリンとの友情関係は以前より一層重要度を増すこととなる。父親の死後、妻と共に嵐が丘へと戻ったヒンドリーは、妻との時間ばかりを優先しヒースクリフとキャサリンの教育などには関心を持つことは無かった。そのため、ヒースクリフとキャサリンの行動を共にする時間は以前よりも増え、2人の友人関係は以前よりも堅固なものに変化する。また、思い出したようにヒースクリフを抜き使い虐待するヒンドリーの存在は、2人にとって共通の敵となり、結束力や仲間意識といったものを強めるのに役立っている。

I wish my father were back again. Hindley is a detestable substitute —

his conduct to Heathcliff is atrocious — H. and I are going to rebel — we took our initiatory step this evening. (16)

加えて、キャサリンは勝気で誰よりも優位に立ちたがる性質の少女である。このことは“*In play, she liked exceedingly, to act the little mistress; using her hands freely, and commanding her companions*” (33) というネリーの言葉から説明がつく。キャサリンにとって一番の友人はヒースクリフであり、彼女はもちろん彼よりも優位に立とうと振る舞い、そしてそれを成功させた。ヒースクリフを父の前でわざと従えようとするキャサリンの姿だけでなく、ヒースクリフの“*When would you catch me wishing to have what Catherine wanted?*” (38) という言葉からも、キャサリンの優位は明らかである。つまり、ヒースクリフにとってキャサリンはただの友人というだけでなく、絶対者とも言える存在であり、この構図は幼少期の子供と母親の関係に共通するところが少なからずある。子が母に禁止されたことを避け、褒められた事をするように、ヒースクリフはキャサリンと大人の目を忍びヒースを駆け回って遊び、いたづらをしたのである。ヒースクリフにとってのキャサリンとの「共感」とはこのような関係によって成立する。彼女の指示に従い彼女の望みを叶えることが彼の喜びであり、彼女の意図を読み取り行動することは彼女との「共感」を生んだのである。たとえ大人に叱られ、折檻されたとしても、ヒースクリフにとってキャサリンとの共感、親の子に対する躰と同様に重大な意味を持っていたのである。

キャサリンにとってのヒースクリフとの「共感」は、ヒースクリフの見解とは若干の意味の違いがある。キャサリンはヒースクリフが自分の意思に従っているというよりもむしろ、彼と自分の望みや苦しみが自然に一致していると考えているようだ。そのため、リントン兄妹を嵐が丘に招いたクリスマス会で、ヒンドリーに暴力をふるわれるヒースクリフを見てまるで自分が殴られているかのような苦痛を感じている。また、キャサリンは次のように語っている。

“*Nelly, I am Heathcliff! — he’s always, always in my mind—not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself—but, as my own being—[...]* (64)”

この台詞は、本体のなかで最も有名な場面の一つだが、キャサリンにとってヒースクリフとの「共感」は潜在的に二人の間に存在しているものであるという認識だということがうかがえる。キャサリンの意思通りに行動するヒースクリフは、彼女にとってまさにもう一人の自分といえる存在だということだ。また、キャサリンがエドガーとの結婚を選択することが出来たのは、ヒースクリフとの間にある先天的な「共感」という精神的な結びつきこそが、この世の中で何よりも強大な力を持っていると考えているからである。法律や肉体的な結びつきは彼女にとって何の意味もないのだ。

アーンショウ氏の死後も、ヒースクリフにはキャサリンという最愛の友人が存在し、彼女と過ごすことによって彼は孤独感を抱くことは無い。しかし、アーンショウ家の令嬢としての立場が変わることなく与えられているキャサリンと違い、ヒースクリフを取り巻く環境は大きく変わり、彼にとっての拠り所となるのはキャサリンの存在だけになっていくのである。ヒースクリフにとってキャサリンとの間にある「共感」だけが心の支えであり、彼のキャサリンへの傾倒性質はこの頃に形成されたものであろう。

ヒースクリフにとってさらなる悲劇は、キャサリンとヒースクリフの鶴の辻屋敷への冒険によって引き起こされる。これをきっかけに、キャサリンはリントン家のエドガーとイザベラとの交友関係を持ち始める。ここでも、ヒースクリフは自身が他者に受け入れられない存在であるということを痛感する。リントン氏や夫人はキャサリンには親切にし、また、自分達の子供達に彼女との交友関係を認めている。一方で、ヒースクリフを見下し、子供達にも彼と関わらないように配慮している。これは、クリスマスに嵐が丘にリントン家の子供達を招待した際に、それを承諾する条件として“naughty swearing boy”(43)を自分の息子に近づけないようにヒンドリー夫妻に要求したことや、エドガー・リントンの“‘I promised mamma that I wouldn't say one word to him, and I didn't’”(46)という台詞からも分かる。

こうして、他人に受け入れられない自分を意識したヒースクリフについて、ネリーは“[...] he contrived to convey an impression of inward and outward repulsiveness [...]”(53)と語っている。自然に生活して嫌われるよりも、先に自ら嫌われるよう行動することは、彼にとって他人に受け入れられない自分を擁護する唯一の手段である。また、そうして他人を自分から受け入れないことによって、自分のプライドを守るという手段に出たのである。

今まで、唯一の友人であるヒースクリフと野良遊び以外をしてこなかった

キャサリンにとって、リントン家の2人は新鮮で刺激的な存在であった。リントン家で躑躅なのおされ、優雅で煌びやかな生活に彼女は心ときめかせ、彼女はヒースクリフとだけでなく新しい友人との時間を多く持ち始める。キャサリンはこの全く性質の違う二つのコミュニティのどちらにも属することによって“a double character”(53)のある少女に変化したとネリーは語っている。

一方でキャサリンの新しい友人関係の仲間には加わることのできなかったヒースクリフは、彼女がリントン家との関わりを深くするのに連れて次第に孤独な時間が増えていく。また、外見や振る舞いもそれまでとは違い洗練されていくキャサリンと、相変わらず汚い格好をする自分を比べ、二人の間にあった「共感」が薄れていると感じ、彼はキャサリンの愛情を疑い始める。また、キャサリンが自分と過ごした日とエドガーと過ごした日の数を比べ、彼女に2人の時間がどれほど失われたのかを理解させようとする。

He pointed to a framed sheet hanging near the window, and continued

—

“The crosses are for the evenings you have spent with the Lintons, the dots for those spent with me — do you see? I’ve marked every day”.(54)

このようなキャサリンの変化に対しヒースクリフは不満を表すだけではなく、空いてしまった距離を埋めるために、つまり彼女との共感を取り戻すために、自分を変化させる、具体的にはネリーにキレイな格好をさせてくれと頼むことや、仕事を休みキャサリンとの時間を作ろうとする努力している。このヒースクリフの行動は、彼が如何にキャサリンを失うこと、つまり彼女にとって完全なる孤独を恐れていたのかが窺える。

しかし、このような努力の甲斐なく、キャサリンとエドガーの婚約を知ったヒースクリフは、失意のうちに嵐が丘を後にする。キャサリンのネリーに語った、“It would degrade me to marry Heathcliff now”(63)という言葉は、ヒースクリフにとって彼女の裏切りであり、彼女との間にあった「共感」は完全に失われたと感じる結果となった。

ヒースクリフにとってもキャサリンにとっても、二人の間の「共感」とは相手の望みや苦しみを自分のものへと移し変えるものである。しかし、キャ

サリンにとってこの「共感」が先天的に存在するものであるのに対し、ヒースクリフにとっては彼女に尽くすことによって得られた孤独から身を守るためのシェルターのようなものだ。彼にとって彼女との「共感」を失うことは、それまでに彼の信じていた社会通念の崩壊にも等しく、彼は自分の生きる指針を失ったと言えるであろう。

2. 「共感」の復活と救い

ヒースクリフとキャサリンの関係は、恋愛関係とは言いがたいものである。しかし、彼らが互いに強く執着しあっているのは間違いない。その執着に反し、二人はキャサリンの死によって引き離されるわけだが、この時のヒースクリフの行動は矛盾に満ちているように思われる。彼は「キャサリンは自分の命である、彼女なしには生きていけない」と死の直前のキャサリンを抱き語るが、死んだ彼女を追って自殺するという考えには至っていない。ヒースクリフが自殺しなかった理由、エミリー・ブロンテが彼に自殺の選択肢を与えなかった理由として、キリスト教社会において自殺が大罪であるということが考えられなくては無い。しかし、ヒンドリーによって召使へと格下げざげされたヒースクリフは、13歳の頃から聖書の教えから遠ざかってしまい、ネリーが言うところの“unchristian life” (255) をおくらせていたし、エミリー・ブロンテもゴンドル詩のなかで自殺したキャラクターを描いていることから、キリスト教の教えがヒースクリフと自殺を結び付けなかった理由としては考えにくい。結果として、ヒースクリフはキャサリンを失った状態で生き続け、それが彼にとって地獄とも言える苦痛の時間であることを後に告白しているが、では何が彼をこの世に縛り付けたのだろうか。また、彼はどのように苦痛から解放され、死に到達するのだろうか。

永遠にキャサリンと共に存在することを望んだヒースクリフにとって、キャサリンの魂が死後どこに存在したのかということは大きな問題である。家政婦のネリーは、キャサリンの魂はキリスト教徒らしく天国、言い換えるのであれば神の元に存在していると考えている。これに対し、ヒースクリフは彼女の魂が天国に向かってはいないと考えている。その理由は、次のネリーとヒースクリフの会話から窺い知れる。

“Yes, she’s dead!” I answered, checking my sobs and drying my cheeks. “Gone to heaven, I hope, where we may, everyone, join her, if

we take due warning, and leave our evil ways to follow good!”

“Did *she* take due warning, then?” asked Heathcliff, attempting a sneer. (129-130)

「教えを守れば天国にいける」というネリーの言葉に対しヒースクリフは、キャサリンは教えを守っていないという意見を持っていることがわかる。つまり、ヒースクリフは教えを守っていないキャサリンは天国に導かれていないと結論付けているのである。

キャサリンと天国が結びつかないと考えているのはヒースクリフだけではない。キャサリン自身も “If I were in heaven, Nelly, I should be extremely miserable.” (63) と語り、また夢の中で天国から落とされたことネリーに告白している。

“This is nothing,” cried she; “I was only going to say that heaven did not seem to be my home; and I broke my heart with weeping to come back to earth; and the angels were so angry that they flung me out, into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights; where I woke sobbing for joy.” (63)

また、「キャサリンは天国に導かれた」と言ったネリーでさえも、“Do you believe such people *are* happy in the other world, sir? I’d give a great deal to know” (129) と語っており、生前のキャサリンの行動はそれほどまでに「神の教え」から程遠いものであり、彼女は天国とは結び付けがたい存在であるということが明らかである。

天国に導かれるはずの無いキャサリンの魂の所在がわからないヒースクリフは、彼女の魂を自身の呪いによって現世に留めようとする。

“Oh! you said you cared nothing for my sufferings! And I pray one prayer — I repeat It till my tongue stiffens — Catherine Earnshaw, may you not rest, as long as I am living! You said I killed you — haunt me, then! [...] Be with me always — take any form — drive me mad! only do not leave me in this abyss, where I cannot find you!” (130)

そして、この呪いの成功をヒースクリフはキャサリンが葬られた日の夜に実感する。彼が彼女の亡骸をもう一度抱きしめようと、墓を掘り返しているその時、ヒースクリフは地中ではなく地上にキャサリンの気配を感じ、墓を掘り返すのをやめる。ヒースクリフの感じた気配とは、具体的にはため息や温かい息のことでキャサリンの姿は見えていない。ヒースクリフは自分の呪いが成功し彼女の所在が分からないという恐怖から解放されるが、気配を感じるのに視覚的にキャサリンを捕らえられないという苦痛にその日から18年間も苛まれる。ヒースクリフの主張するキャサリンの気配が彼の幻覚か否かはさておき、彼はキャサリンの亡霊に苦しめられる結果になったのである。

“I looked round impatiently — I felt her by me — I could *almost* see her, and yet I *could not*! I ought to have sweat blood then, from the anguish of my yearning, from the fervour of my supplications to have but one glimpse! I had not one. She showed herself, as she often was in life, a devil to me![...] It was a strange way of killing, not by inches, but by fractions of hair-breadths, to beguile me with the spectre of a hope through eighteen years!” (221-222)

ヒースクリフの最終的な望みは、キャサリンと肉体的にも精神的にも永遠に融合することである。そのため、キャサリンの魂が地上に留まり続ける限り、ヒースクリフもまた自身を地上に留めておく必要があり、自分自身の肉体が減じた後、その魂がキャサリンと共にあるという確証が得られない限り彼は死を選ぶことが出来ないのである。キャサリンを地上に留めて置くために口にした呪いは、結果としてヒースクリフを地上に留めておく、つまり生きていくことを強いている。ヒースクリフの呪いはキャサリンにだけでなく、ヒースクリフにも有効だったのである。

では、ヒースクリフはどのようにして呪いやキャサリンの亡霊に与えられる苦痛から解放され、キャサリンとの融合を果たすのだろうか。

ヒースクリフが彼女の亡霊に望んだことは、彼の“‘drive me mad!’”(130)の言葉が表すように、彼のそばにいて彼を苦しめることである。彼の望みどおり、キャサリンの亡霊は気配だけで、姿は表さないという手法で18年間あまりもヒースクリフの心をかき乱し続ける。その結果ヒースクリフは昼夜問わず気配を現すキャサリンの亡霊によって不眠症に陥り、また彼女の姿を視

覚的に捉えようと彼女の墓を暴くという狂气的な行動を起こしている。

自分が彼女の魂に望んだこととはいえ、18年にもわたる苦痛は彼の予想をはるかに超えるものであったようだ。キャサリンに対するヒースクリフの愛は、彼がアーンショウ家とリントン家のすべてを手中に収め、エドガー・リントンの死を迎えた時、ヒースクリフは18年間の自分の苦痛を語る。この何十行にも渡るヒースクリフの告白の中でヒースクリフは“a devil to me!” (221) と、自分自身に苦痛を与えるキャサリンに対し「悪魔」という言葉を用いている。また、キャサリンの気配の存在する地上を“*Infernal*” (221) と地獄に例え、彼女に与えられる苦痛を“*It racked me!*” (221) と語り、拷問に例えている。幼少の頃から共に育ち、自分の一生をかけて愛した女性に対してこのような言葉を使うだろうか。これらの言葉は愛情から生まれたものでは無く、むしろ彼の苦痛やキャサリンに対する憎しみや怒りから発せられたものであろう。ヒースクリフの告白は、彼の長い苦痛を描き出すだけでなく、その苦痛から生まれたキャサリンに対する憎しみや怒りを表現しているのである。

ヒースクリフの苦痛からの解放のきっかけは、他者から与えられる孤独に恐怖し自ら他人を寄せ付けようとしなかった彼にとって皮肉なことに、アーンショウ家ともリントン家とも係わり合いのない、完全なる第三者、ロックウッドが嵐が丘を訪れることによってもたらされる。エドガー・リントンの死後空き家となっていた鶴の辻の屋敷を借りることになったロックウッドが二度目に大家であるヒースクリフを尋ねた際、悪天候のために嵐が丘に泊まることとなる。ヒースクリフに隠れて女中のジラが案内した部屋は、かつてのキャサリンの部屋だった。そこで眠ったロックウッドは奇妙な夢を二つ見る。一つはジェイベス・ブランダム牧師の説教を聴くために教会を訪れる夢、そしてもう一つがキャサリンという名前の子供の夢である。二つ目の夢の中で、ロックウッドはキャサリンという名の子供の幽霊に“*Let me in!*” (21) とせがまれ、割れた窓から入り込んだ子供の手腕に掴まれる。恐ろしさに叫び声を現実でも上げたロックウッドの声に起きたヒースクリフに、彼はこの夢の内容を報告している。

“And that minx, Catherine Linton, or Earnshaw, or however she was called — she must have been a changeling — wicked little soul! She told me she had been walking the earth these twenty years: a just

punishment for her mortal transgressions, I've no doubt!" (22)

ロックウッドが夢の中でキャサリンと交わしたすべてが語られているわけではないが、この台詞からキャサリンが20年間の地上を彷徨っていた事が確実にヒースクリフに伝わる。また、“punishment”という言葉は彼女の20年にも渡る嵐が丘からの締め出しが、彼女にとって苦痛であるということを示している。ヒースクリフには気配としてしか現れないキャサリンの亡霊が、ロックウッドを通して彼女の苦痛をヒースクリフに伝えたのである。

ロックウッドの話は、ヒースクリフのキャサリンに対する見方を根本的に見直すきっかけとなる。ヒースクリフはキャサリンの亡霊は自分を恨んでいるために彼に苦痛を与える、つまり罰を与える者であると考えている。しかし、ロックウッドの夢に現れたキャサリンは、ヒースクリフと同様に苦しみ嘆く者である。彼のイメージしていた亡霊と正反対の姿に、彼は自然とキャサリンの苦痛の原因に関心を寄せ始めている。このことの最も分かりやすい例は、ヒースクリフのロックウッドに対する親切な対応である。彼はロックウッドが鶴の辻屋敷に戻る際、自ら案内人を名乗り出ているし、さらにはロックウッドが病気で寝込んでいる間に見舞いに行くなどしている。これは、前章でも述べたように他者との関わりを極端に嫌うヒースクリフにとっては非常に珍しい、ヒースクリフらしくない行動である。彼が自分の借家人の安全や病状を心配してこのような行動に出たのだとすれば、ロックウッドが嵐が丘を訪ねた時に見せたヒースクリフの対応の説明がつかなくなる。彼にとっての興味は借家人の安全や病状ではなく、むしろキャサリンの亡霊の夢の話のほうだったのではないだろうか。結局ヒースクリフがロックウッドに夢の話を再度尋ねるといったシーンは描かれてはいないが、これらの行動はキャサリンの夢への関心に起因するものであると考えなければ説明がつかないのである。

「キャサリンの苦痛の原因は何か」という疑問は、ヒースクリフにキャサリンとの思い出の全てを回想させたに違いない。中でも、彼女の死に際の言葉を彼は何度も反芻したであろう。

“I'm not wishing you greater torment than I have, Heathcliff. I only wish us never to be parted — and should a word of mine distress you hereafter, think I feel the same distress underground, and for my own

sake, forgive me!" (125)

"If I've done wrong, I'm dying for it. It is enough! You left me too; but I won't upbraid you! I forgive you. Forgive me!" (126)

キャサリンのこれらの言葉は、ヒースクリフに対する復讐心というよりも、彼に対し許しを請うものである。つまり、ヒースクリフの赦免こそ彼女の本当の望みであり、彼の赦免を得られないことこそ彼女の苦痛の原因なのだ。また、この時のキャサリンの姿はヒースクリフにとって長く、罰を与えるものとして存在しているキャサリンとは正反対の姿、つまりロックウッドが夢に見た苦悩する者の姿である。キャサリンの死の間際の姿と、ロックウッドの夢に現れた少女の姿が一致することは、キャサリンは罰を与える存在ではなく、彼女こそヒースクリフによって許されることなく罰を与えられ続けた存在であることを示唆している。キャサリンの苦痛と原因、そして望みを認識することは、ヒースクリフにとって彼女との「共感」を取り戻すきっかけと言えるであろう。

前章でも述べたが、ヒースクリフとキャサリンの「共感」は他者の望みや喜び、苦しみを自分のものへと置き換え共有することである。ならば、キャサリンの真意を認識したヒースクリフに次に求められるのは、彼女の思いを自分のものへと移し変えること、つまりキャサリンを許すことである。ロックウッドの夢の話から、ヒースクリフは他者を許すということに積極的に取り組んでいる。また、その赦免はキャサリンに対するものだけではなく、キャサリン二世やヘアトンに対しても与えられている。このキャサリン二世やヘアトンに対し向けられた赦免は、長年人を憎むことに自らの人生を注いできたヒースクリフにとって、他者を許すという心を持つためのリハビリテーションともいえるかもしれない。

まず、ヒースクリフはネリーを嵐が丘に呼び寄せる。彼女はキャサリン二世のこの世で唯一心を開く人物であり、幼い頃のヘアトンの乳母でもある、『嵐が丘』という作品における母性の象徴である。彼女を呼び寄せることは、キャサリン二世を孤独から解放することを意味している。また、次第に交友を深めるキャサリン二世とヘアトンをこれまでのように自分の権力を最大限に使い無理に引き離すことも無い。キャサリン二世がヘアトンにヒースクリフを憎むように仕向けようとし、悪態をついた時も、彼女に手を上げることは無く解放している。

こういったリハビリテーションの甲斐もあり、キャサリンを許す、つまり彼女との「共感」を取り戻すことに成功したのであろう。ヒースクリフは、嬉々とした様子で、彼にしか見えない幻を目で追い掛け回し、食事や睡眠もとらなくなる。この時のヒースクリフの様子をネリーは次のように語っている。

He muttered detached words also; the only one I could catch was the name of Catherine, coupled with some wild term of endearment or suffering, and spoken as one would speak to a person present — low and earnest, and wrung from the depth of his soul. (253-254)

ヒースクリフのこういった変化は、彼が視覚的にキャサリンを捉えていることを現している。また、食事や睡眠への欲求の喪失は、彼を死へと導く。彼にとっての死は前述したように、彼とキャサリンの魂が死後共にあるという確証なしには受け容れがたいものである。この確証を得たからこそ、彼は自身に訪れた変化を素直に受け入れたといえるであろう。つまり、ヒースクリフが努力しキャサリンを許すことによって、彼は彼女との「共感」を取り戻し、その「共感」が彼に再び人生の指針を与えたのである。ヒースクリフが取り戻したキャサリンとの「共感」は彼を苦痛から解放し、安心して死を選ぶ環境を与えたのである。

結 論

ヒースクリフにとってキャサリンとの「共感」は、得られていれば彼に幸福を、失ってしまえば迷走を与える、彼の人生の指針ともいえるものである。また、この「共感」は両者が喜びや悲しみといった感情全てを共有するだけでなく、一方の犯した罪ですら許容することによって成立しているのである。これは、二人の関係において疑いや憎しみ、それだけではなく自負の精神が認められていないということだ。自分のことではなく相手のことを第一に考える。この姿勢が求められているのだ。

また、幼少期に築き上げられた「共感」は、二人を異体同心の関係に導いている。つまり、二人は精神で結ばれる関係であったということだ。キャサリンはこの精神の結びつきこそ、この世界で最も崇高で強力なものだと考え、

エドガー・リントンとの結婚を選ぶ。ヒースクリフもまた、キャサリンを失った後イザベラ・リントンを結婚相手に選ぶ。二人は精神的な結びつきを重視し、法律や肉体による物理的な結びつきを軽んじているのだ。しかし、結果として、二人は現世で叶えられなかった物理的な結びつきを、死後に求めている。キャサリンは死の間に、ヒースクリフを二度と離れてしまうことが無いようにきつく抱きしめる。ヒースクリフもまた、自分の遺体が彼女の遺体と共に朽ち二人で一つの物体になることを望み、それが叶うように寺男に指示を残している。これは「異体同心」という関係が永遠のものではないということを知った二人が、「一心同体」の関係を求めたということを示しているといえるだろう。

そして、私たち読者は、精神での結びつきがいかに脆く壊れやすいもので、言うなれば机上の空論であるのかを、この『嵐が丘』という作品を通して思い知らされるのだ。

注

1. Brontë, Charlotte. "Editor's Preface to the New Edition of *Wuthering Heights* (1850)." *Wuthering Heights: the 1847 text Backgrounds and Contexts Criticism*. By Emily Brontë. Ed. Richard J. Dunn. 4th ed. New York: Norton 2003. 316
2. テキストは Brontë, Emily. *Wuthering Heights: The 1847 Text, Backgrounds and Contexts Criticism*. Ed. Richard J. Dunn. 4th ed. New York: Norton 2003. を使用し、以下頁数のみを丸括弧内に示すことにする。

参考文献

- Miller, J. Hillis. *The Disappearance of God: Five Nineteenth-Century Writers*. Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press. 1975.
- Brontë, Emily. *The Complete Poems*; Ed. Janet Gezari. New York: Penguin. 1993.
- 廣野由美子 「『嵐が丘』の謎を解く」 大阪、創元社、2001
- 川口喬一 「『嵐が丘』を読む ポストコロニアル批評から「鬼丸物語」まで」 東京、みすず書房、2007